京都暁星高校

祈りと美化 1世紀

緑豊かな中庭を散策する生徒たち。校舎は平屋建てで開放感がある＝宮津市獅子崎

全校生210人「家族」の絆育む

まなビバ! 教育／2016

「与えられた場所で咲きなさい」。ミサに参加した約40人の生徒らを前に、フィリピン人のホセ・ノレッラ神父(33)はやさしく語りかけた。毎月1回、京都暁星高のマリア棟で開かれるミサには、日本で2番目に古い天主堂、カトリック宮津教会（宮津市宮本）から司祭を迎えている。

「神から与えられた命で、その聖なる使命を果たしなさい」。ホセ神父はよどみない日本語で生徒たちに思いを伝える。新約聖書の一節を読み、聖歌をともに歌う。最後に、生徒一人ひとりの頭に手をかざし、祝福を与えた。1009年前の女子裁縫伝習所時代から変わらない、祈りの風景だ。

毎日授業が終わると、生徒は手にぬか袋を持ち、制服にかっぽう着を羽織る。全校一斉に取り組む掃除の時間だ。学びやを慈しむように、感謝の気持ちを込めて、男子も女子もひざまずき、木造校舎の床をぬかで磨いていく。同校が「人間の根っこづくり」と教育の基本に据える「祈り」、「美化」の実践だ。

教育方針は変わらない一方で、学校のありようは時代とともに大きく変化してきた。1907年、宮津にキリスト教をもたらしたフランス人宣教師ルイ・ルラーブ神父が、女子教育の場として天主堂の一角に、同高のルーツとなる裁縫伝習所を設立した。20年後には宮津暁星女学院に。61年には暁星女子高校と改称。2003年には男女共学普通科総合選択制の京都暁星高校として新しいスタートを切った。校舎も、裁縫伝習所時代の天主教会内から女子高時代の宮津市内、さらには緑豊かな同市獅子崎へ。2度校舎が移った。

全校生徒210人の小規模校。二十数人で1クラスの編成となっている。クラス・学年を超えたつながりを大切にし、教員は生徒全員の顔と名前を覚えるなど、家族のような絆を育みつつ、3年間の高校生活を過ごす。1年の亀井美凪（みなぎ）さん(15)は「休み時間に先生に質問すると、とことん教えてくれるのがうれしい」。小さいながらも卒業生は9900人を超えた。来年は創立110年を迎え、さらなる飛躍をめざす。（寺脇毅）

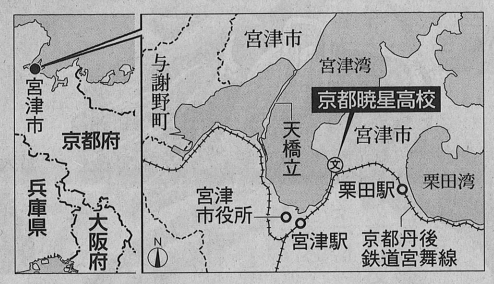
秋休みでボランティアも

建学の精神はキリスト教の教えに立脚し、とくに精神性を大切にした教育をめざす。一人ひとりの能力を尊重し、学習だけでなく人間性の成長も大切にしている。校訓は「自尊」「自知」「自制」。

玉手健裕校長は「全ての生徒にとって居心地のいい場所でありたい」と話す。

1年次には共通科目を学ぶが、2年次からは進学、福祉、情報の3コースに分かれる。2学期制で、夏・冬・春の通常の休暇に加え、約2週間の「秋休み」がある。秋休み期間中には、フィリピンでのワークキャンプなど、体験プログラムやボランティア活動などがさかんに行われている。

府外からの生徒もいるため女子寮「聖母寮」がある。元暁星女子高があった宮津市柳縄手にたち、現在15人の生徒が入寮する。クラブ活動は、野球、硬式テニス、バスケットボールといった運動部と、放送、茶道、華道、音楽、福祉の文化部がある。



ウォーカソン 寄付募り歩く

全校生徒、教職員が参加するウォーカソン。長距離を歩くことで寄付金を集める募金活動だ。

1999年、混乱に陥った東ティモールにトラックを贈ろうと取り組みが始まった。同年11月に旧加悦町から同高までを歩き、約132万円を集めた。その後、援助対象をフィリピンに変えて続けられている。有志による東日本大震災復興支援のウォーカソンも行われている。

13回目となる昨年は、11月22日午前9時に与謝野町加悦のカトリック加悦聖堂を出発。天橋立を経由し午後4時に同高までの約26キロを236人が歩ききった。

3年小池優花さん(18)は「クラスメートと励まし合って歩いた。フィリピンに募金できるのはうれしい」と話した。

井戸建設や植林 支援で交流

キリスト教の慈愛の精神に基づき、同高ではボランティア活動も盛んだ。フィリピンでのワークキャンプは、国際協力ボランティア活動として2004年から始まった。ウォーカソンで集まった寄付金をそのまま送金するのではなく、毎年実際に生徒たちが現地に赴き、井戸建設や植林活動をして、現地の人たちと交流を深めている。

11年からは毎年、東日本大震災で被害を受けた岩手県釜石市でも、夏休みと秋休み期間を利用して生徒と教職員がボランティアをする。昨秋初めてボランティアをしたという2年の岡野優実さん(16)は「明るく前向きに頑張っている人がたくさんいた。被災地の現状を、親や級友に伝えました」。

通学バス 生徒の8割が利用

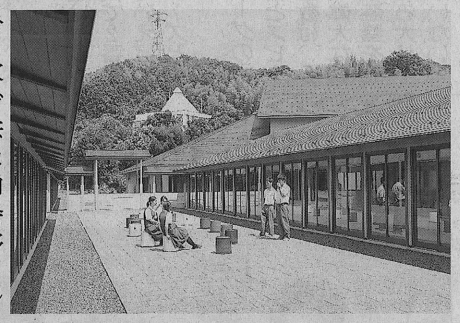
生徒の8割近くがスクールバスを利用。丹後一円から通学する生徒たちのために、大型バス2台、マイクロバス2台の計4台のバスが稼働している。大型バスは、間人（たいざ）、加悦の2コース、マイクロバスは大宮、岩滝、宮津駅の3コースで、毎日10便運行している。夏休みなどの休暇期間も、生徒が登校する必要があるときはバスも走る。

バスの運行が始まったのは1986年。旧加悦町内を走っていた加悦鉄道が廃止となり、通学が困難になる生徒たちのことを考えての導入だった。女子高時代のことだ。与謝野町から乗る1年の矢嶋竜貴さん(15)は「乗り換えがないので、車内でじっくり予習や復習ができていい」と話す。

木造平屋 緑に囲まれた校舎

夏の緑がまぶしい丘に囲まれ、木造平屋建ての校舎が取り囲む中庭には芝生が広がる。3年、須川樹希也（じゅきや）さん(17)は「オープンスクールで来て、温かみのある木造校舎を見て、ここで勉強したいと思った」と入学動機を話した。

元は関西電力の火力発電所だった。少子化で女子高から共学校へ移行することになった。宮津市内中心部にあった校舎は狭く、老朽化し移転を模索していた。2000年夏、寮母のシスターが同発電所操業停止の新聞記事を読んだ。跡地利用は「白紙の状態」とある。「これだ」と思った当時の米田校長は記事を手に関西電力を訪れ交渉。移転につなげたという。



次回（16日）は府立城陽高校（城陽市）を紹介します。